

初期マルクスの 思想形成

山中隆次



新評論

初期マルクスの思想形成

山中 隆次 著

新 評 論

著者紹介

山中 隆 次

なか たか たち で

1927年 東京に生まれる。

1952年 東京商科大学（現一橋大学）卒業。

現 職 中央大学商学部教授。

専 攻 経済学史

著 書 『マルクス経済学』（共著）有斐閣，1966年

『資本論の成立』（共著）岩波書店，1967年

『マルクス資本論入門』共著，有斐閣，1977年。

訳 書 マルクス『賃労働と資本』（共訳）角川文庫，1963年

ヘス『初期社会主義論集』（共訳）未来社，

1970年

初期マルクスの思想形成

1972年11月20日 初版第1刷発行

1981年12月15日 初版第7刷発行

定価 2000円

著 者 山 中 隆 次

発行者 二 瓶 一 郎

発行所 株式会社 新 評 論

〒160 東京都新宿区西早稲田3-16-28

電話 東京 (203) 7391番

振替 東京 6-113487番

落丁・乱丁本はお取替えします

印 刷 白鷺舎印刷工業(68)

製 本 清水製本所

© 山中 隆 次 1972年

(検印禁止)

Printed in Japan

3033-330056-3177

はしがき

本書は、私がこの十数年間に発表した論文を中心にとめた「初期マルクス」研究であり、一八四一年の『学位論文』から一八四四年の「ヘーゲル法哲学批判序説」までの初期マルクスの思想形成を追究したものである。

私の初期マルクスにたいする関心は、ほぼ四半世紀以前の学生時代にさかのぼる。公式主義を排し対象の内在的理解を強調される恩師、高島善哉教授の指導のもとで『資本論』研究に没頭していた私は、当時の価値論論争、主体的唯物論の影響も受け、次第に初期マルクスに、その『経済学・哲学草稿』に強い関心をもちはじめた。二・一ストの弾圧から全面講和の不成立に至る、戦後民主主義運動の最初に迎えた曲り角が、マルクス主義理論を思想的・主体的に把え直す出発点となったのである。私のマルクス思想形成史にたいする関心は、さらにその母体であるヘーゲル哲学に、とりわけヘーゲル弁証法の生成史に向けられていった。その結果の産物が、一七九〇年代のヘーゲル神学・政治論を中心にとめた卒業論文『ヘーゲル初期研究』である。論文提出後、ルカーチの大著『若きヘーゲル』(G. Lukács, *Der junge Hegel*, Wien, 1948)の発刊を知り、貪るように読んだのがまだ昨日のことのように思われる。

その後、卒業論文の継統として、ヘーゲルのイェナ時代の市民社会観、経済思想の研究を進めていったが、本命はマルクス主義の原点、初期マルクスにあった。ふたたび初期マルクスに戻り、それを究めるには、そのまた原点ともいうべきマルクスの『学位論文』から研究をスタートさせねばと考え、それに関する小論を発表した(『経済研究』九巻二号所収、一九五八年)。しかし、それを通して私は、当然のことながら、ヘーゲルからマルクスへの

過渡期の思想で、初期マルクスの知的風土である「青年ヘーゲル派」にたいする研究の必要を痛感した。当時発刊されたコルニユの大著『マルクスとエンゲルス』第一巻 (A. Cornu, *Karl Marx und Friedrich Engels. Leben und Werk*. Bd. 1, Berl., 1954) にも刺激され、私はそれまでわが国ではほとんど未開拓のルーゲら「青年ヘーゲル派」、さらにはポーランドのチュシニコフスキーやドイツの初期社会主義者ヘスの研究を進めていった。このことはマルクス思想を歴史の縦断のみでなく横断において把握、相対化し、客観化する余裕を私に与えた。本書はこれらのなかからルーゲとチュシニコフスキーに関する論文を選び出し、補論ⅠとⅡに再録した。

もとより本命は初期マルクスである。これら初期マルクスの同時代思想家群の研究を進めながら、私は三たび初期マルクスに戻った。こうして、さきに発表したマルクス『学位論文』の研究を新しく書き改め、それにつづく初期マルクス思想の発展についても、『ライン新聞』時代、『ヘーゲル国法論批判』、『独仏年報』掲載の「ユダヤ人問題によせて」第一論文のマルクスへと研究を進めていった。これによって私はマルクスの偉大さを、同時代思想家群との対比のなかで、あらためて再認識した。本書の第一章から第四章までが、これらの研究の再録である（再録の分については、各章の末尾に発表誌名と号数を付記した。若干、全体の統一をはかるため本文、表題を補筆訂正した箇所もある）。そして今回、これにつづく初期マルクス思想の発展を、すなわち「ユダヤ人問題によせて」第二論文と「ヘーゲル法哲学批判序説」のマルクスを新たに書き加え、本書の第五、第六章にあてた。

以上は本書の成立経過の素描である。これからも明らかなように、本書は短期間に一気に書き下されたものではない。その大半はヘーゲル——青年ヘーゲル派——マルクスと、私の渉猟した足跡をそのまま再現したものにすぎない。そのため、そこにいくらかの視点のずれがみられるかもしれない。とはいえ、そこにはおのずから道らしき道が踏み固められていった。これもまた、以上の渉猟経路から推測できるように、本書は初期マルクス思想の発展を、「青年ヘーゲル派」らの知的風土とヘーゲル哲学の母体からの自己形成として把握しようとする。その追体験

が本書の第一の目的である。補論としてルゲおよびチエシニコフスキー研究を再録した理由もここにある。

また、この時期のマルクスはレーニンの有名な定式によれば、「観念論から唯物論へ」の移行および「革命的民主主義から共産主義へ」の移行の時期とされている。本書はこの二つの規定を統一的に把握し、それを「国家から市民社会へ」の移行として内容的に追究しようとする。いうなれば「哲学から経済学へ」であるが、それはたんなる経済学ではない。人間解放の経済学としてマルクス経済学生誕の思想的根源を探ること、これが本書の第二の目的である。またこれによって、本書の第一の目的、ヘーゲルおよび「青年ヘーゲル派」との思想的格闘を通じての初期マルクス独自の思想形成も、一層内容的に解明されよう。『学位論文』にはじまる本書が「ヘーゲル法哲学批判序説」で終っている理由もここにある。

もちろん、初期マルクス自身がそうであるように、私の「初期マルクス」研究も本書をもって完結したわけではない。その前方には『経済学・哲学草稿』や『ドイツ・イデオロギー』等の巨峰がそびえている。視野もヘーゲル哲学のみならず、フランス社会主義、イギリス古典経済学へと拡大していかねばならない。また一八四八年革命をめざす「三月前」(Vor März)期のドイツ社会思想・運動に占める初期マルクス(エンゲルスを含む)の位置づけも必要である。そのためには、ヘスをはじめ名もよく知られていない連峰にもよじ登らねばならない。いうなれば、本書はこれらの巨峰、連峰に向う一里塚であり、その裾野の思索にすぎない。本書にたいし大方の御批判を受け、また良知力氏(『初期マルクス試論』未来社、『マルクスと批判者群像』平凡社)や広松渉氏(『エンゲルス論』盛田書店、『青年マルクス論』平凡社)ら先導者の業績に学び、「初期マルクス」の踏破を成就したいと思っている。

本書の完成にさいし、私は実に多くの方々からあたたかい援助を受けた。私の遅々たる研究の歩みにたいし、たえずはげましの言葉を与えて下さった恩師、高島善哉教授をはじめとして、文献利用の便宜と研究上の助言を与えて下さった数多くの経済学史学会会員ならびに和歌山大学経済学部先輩、同僚の諸氏にたいし、心から感謝の意

を表したい。また遅筆な私が本書をこのように上梓できたのは、ひとえに新評論、二瓶一郎氏の寛容と尽力によるものである。ゼミナールの先輩であり、寮で起居を共にして以来の同氏の変らぬ温情にたいし、心から感謝の意を表したい。

一九七二年九月一五日

山中 隆次

目次

はしがき

第一章 初期マルクス思想の出立点	九
------------------	---

——『学位論文』（一八四二年）——

一 問題の所在	九
---------	---

二 『学位論文』の問題意識	二三
---------------	----

三 「自意識」の哲学	二二
------------	----

四 「青年ヘーゲル派」との関係	三四
-----------------	----

第二章 国家から市民社会への移行	四三
------------------	----

——『ライン新聞』（一八四二—四三年）——

一 問題の所在	四三
---------	----

二 「言論・出版の自由」論	四六
---------------	----

——『ライン新聞』時代初期——

三 「無産大衆」の登場	六二
-------------	----

——『ライン新聞』時代中期——

四 「言論・出版の自由」再論	六六
----------------	----

——『ライン新聞』時代後期——

第三章	政治的疎外論の確立	六
-----	-----------	---

——『ヘーゲル国法論批判』（一八四三年三月—夏）——

一	問題の所在	六
二	フォイエルバッハとマルクス	七
三	立憲君主制批判	七
四	官僚国家批判	一〇
五	身分制議會批判	一〇
	——代議制議會論——	
六	民主主義論	一一

第四章	政治的解放と人間的解放	一七
-----	-------------	----

——「ユダヤ人問題によせて」第一論文（一八四三年秋）——

一	問題の所在	一六
二	パウアーの「ユダヤ人問題」	一三
三	政治的解放論	一四
四	人間的解放論	一四

第五章	人間的解放と社会的解放	一五
-----	-------------	----

——「ユダヤ人問題によせて」第二論文（一八四三年秋）——

一	問題の所在	一五
二	パウアー論文「自由になりうる能力」	一五
三	市民社会形成の論理	一六

四	ヘスとマルクス	一六
第六章	人間的解放とプロレタリア解放	一八五
	——「ヘーゲル法哲学批判序説」(二八四—三四四年)——	
一	問題の所在	一八五
二	宗教批判の實踐的意義	一九一
三	ヘーゲル法哲学批判の實踐的意義	一九四
四	哲学とプロレタリアートの結合	二〇一
補論 I	ヘーゲルとルーゲ	二二
一	問題の所在	二二
二	「三月前」期の自由主義運動	二四
三	ヘーゲル批判への道	二三
四	ルーゲのヘーゲル国家論批判	三七
五	ルーゲ、フォイエルバッハ、マルクス	三七
補論 II	ヘーゲルとチェシニコフスキー	四三
一	問題の所在	四三
二	ヘーゲル批判の基本視角	四七
三	ヘーゲル哲学の充足	四九
四	ヘーゲル哲学の破壊	五五
五	チェシニコフスキーとマルクス	六三

参考文献 (二六) 二六〇
人名索引 (二六) 二七〇

第一章 初期マルクス思想の出发点

——『学位論文』（一八四一年）——

一 問題の所在

カール・マルクス (Karl Marx, 1818—83) の思想的発展は、その初期に限定してみても、マルクス思想そのものと同様にダイナミックである。これを、たとえば、はじめに萌芽としてあった弁証法的唯物論の量的成長の過程とみる考えほど幼稚な見方はなからう。といって、それはヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770—1831) の弁証法的観念論の摂取 (第一段階) にはじまり、フォイエルバッハ (Ludwig Andreas Feuerbach, 1804—72) の唯物論の摂取 (第二段階) を媒介にして、ヘーゲル観念論の転倒による弁証法的唯物論の成立 (第三段階) に終る質的発展とみるような、単純な過程でもない。それは、本書で以下具体的に展開されるように、ひとことでは、量的にして質的であり、形式は観念論でありながら、内容は唯物論的方向をとり、それが観念論的形式を打破して弁証法的唯物論を成立させていくという、それ自体、弁証法的内容に満ちた、しかし、マルクス自身にとって、無意識な、複雑な過程をたどるのである。

以上は、マルクス思想の発展を、哲学上の問題、観念論から唯物論への道と限定してみての話にすぎないが、しかし、このような「観念論から唯物論へ」の青年マルクスの思想の発展にしても、それは、青年マルクスの、ひとつひとつの歩みにおける問題意識、具体的には、当時の「三月前」期のドイツや一八四八年二月革命前のヨーロッ

バの提起する諸問題にたいする青年マルクスの態度決定と深くからみあっていることはいうまでもない。加うるに、青年マルクスの思想の発展は、たんに哲学上の発展に限定されない。レーニンの強調したマルクス主義の三源泉を想起するまでもなく、青年マルクスの思想の発展は、ドイツ古典哲学、とくにヘーゲル哲学との関連だけでなく、他の二源泉、フランス社会主義およびイギリス古典経済学との関連なしに論ずることはできないであろう。いな、さきの「観念論から唯物論へ」の哲学上の発展さえも、ヘーゲル哲学だけでなく、フランス社会主義、イギリス古典経済学との関係なしには、正当に把握することは不可能であろう。まさに「マルクス思想の形成は錯綜する政治的理論的諸問題の複合体」なのである。

哲学から経済学へ

さて、初期マルクスの思想の発展を追究するにさいし、その出发点をどこに求めるかは、それを追究するものの視角、テーマによりいろいろと異なるであろうし、また異なることができる。たとえば、マルクス思想の哲学的発展を追究するものは、一八四一年の『学位論文』⁽²⁾が、また経済学上の発展を追究するものは、一八四四年の『経済学・哲学手稿』⁽³⁾が、それぞれの出发点と考えられよう。まさに「前進とは根拠すなわち根源的にして真なるものへの復帰であって、出发点となるところのものは、むしろこの根拠に依存し、実際はこれによって産出されるものに他ならぬ」⁽⁴⁾のである。

ところで、本書の視角をあらかじめのべるならば、それは、通俗的にいって、哲学者マルクスから経済学者マルクスへの発展を追究することにある。加うるに、「青年ヘーゲル派」という知的環境にかこまれつつ、青年マルクスが、いかにしてマルクス主義者になっていったか、そういう視点で初期マルクスの思想の発展を把握しようとする立場でもある。以上二つの理由から、本書は、初期マルクスの思想発展の出发点を、彼マルクスの「精神的創造

力の最初の充実した作品⁽⁵⁾』といわれている一八四一年の『學位論文』およびその『準備ノート』に設定した。そこには、独力でヘーゲル哲学にたどりついた一八三七年以来、パウアーたちの「青年ヘーゲル派」と知的交流を続けながら、ヘーゲル哲学と対決していった、青年マルクス独自の歩みとその最初の成果が示されているのである。以下それらを検討し、初期マルクス思想の出立点を明らかにしてみよう。⁽⁷⁾

(1) N. I. Lapin, *Der junge Marx im Spiegel der Literatur*. Berl., 1965. S. 8. (Original russisch, 1962).

(2) その代表的なもの G. Lukács, 'Zur philosophischen Entwicklung der jungen Marx (1840—1844)'. In: *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*. Jg. 2, Hft. 2, 1954. SS. 288—343. 平井俊彦訳『若きマルクス』ミネルヴァ書房、昭和三十三年。

(3) その代表的なものは D. I. Rosenberg, *Die Entwicklung der ökonomischen Lehre von Marx und Engels in den vierziger Jahren des 19. Jahrhunderts*. Berl., 1958. (Original russisch, 1954). 副島種典訳『初期マルクス経済学説の形成』大月書店、昭和三十三年。

(4) G. W. F. Hegel, *Wissenschaft der Logik*. In: G. Lasson (hrsg.), *Hegels sämtliche Werke*, Bd. 3, Lpz., 1923. S. 55. 鈴木権三郎訳『大論理学』上巻、岩波書店、昭和七年。八二ページ。

(5) D. Rjazanov (hrsg.), *Marx/Engels Gesamtausgabe*. I. Abt., Bd. 1, I. Halbbd., Fkt. a. M., 1927 (Zs. MEGA, I-1/1 と略称) S. XXIX.

(6) 青年マルクスが、ベルリン大学に入学（一八三六年一〇月二日）以来、どのようにしてヘーゲル哲学にたどりついたか。それについては、マルクス自身、一八三七年一月一〇日つけの父親宛の手紙で詳しくのべている。それによると、当時マルクスは、一方では、ボン大学の時代（一八三五—一八三六年）と同様、詩作に没頭しては、「あるもの」とあるべきものとの完全な対立」に悩み、他方では、ベルリン大学入学の目的でもあった法学の勉強に精を出し、とくに「法の領域を一貫する法学を組み立てようと努め」ていた。しかし、そこでも「同じく観念論に固執する、現実と当為の対立が非常にじゃましている」ことに気がついた。それは、具体的にいうと、「法の形而上学、すなわち、もろもろの基本命題、反省、概念規定が、あらゆる現実の法律や、その実際の形式から分離している——あたかもフイヒテにおいてそうであるように——」という反省であった。その結果、マルクスは、「私がこれまでカントやフイヒテのそれを参考

にして心に抱いてきた観念論から脱却し、現実そのものに理念を求めるようになった。これは、もうヘーゲル哲学である。それを、もう少し具体的にいえば、こういうことである。「法律、国家、自然、真の哲学といった、生きた思想の世界を具体的に表現するばあいには、対象そのものを、その発展においてとらえねばならないのであって、そこに勝手な区分を持ちこんではならない」ことであり、さらに「事物そのものの理性は、自己矛盾的に進展し、その統一を、それ自身の中に見出さねばならない」という把握である（以上傍点は引用者）。

以上の経過から、われわれは、マルクスが一八三七年に、主として法哲学の構成をめぐって、カント、フイヒテの主観的観念論からヘーゲルの客観的観念論へと、まっしぐらに突き進んでいったことを知る。それは、マルクス自身にとっては、「観念論から」の「脱却」を意味したが、ヘーゲル哲学の体系でなくて、その方法、弁証法において、マルクスがヘーゲル哲学と結合したことは、注目すべきである。「事物そのものの理性は、自己矛盾的に進展し、その統一をそれ自身の中に見出さねばならない。」この、マルクスがヘーゲルから引き出した弁証法の原理は、その後のマルクス思想の発展における重要な要素を形成する。

ともあれ、こうして、ヘーゲル哲学にたどりついたマルクスは、シュトラロー（Stralow）で、病める身体をなおしているあいだに、「ヘーゲルをはじめから終りまで、ヘーゲルの弟子の大部分をあわせて」徹底的に、「ヘーゲル哲学を身につけること」に努めた。そしてさらに、この「シュトラローで、友人たちと数多く会合していくなかで、ひとつのドクター・クラブに入会した。そこには、「青年ヘーゲル派」の中心人物、パウアー兄弟（兄 Bruno Bauer, 1809—82, 弟 Edgar Bauer, 1820—86）ルーテンベルク（Adolf Rutenberg, 1808—69）ケッペン（Karl Friedrich Köppen, 1808—63）とよった人びとがいた。Cf. MEGA, I-1/2, S. 213—21.

(7) ここでマルクス『学位論文』の公刊史を簡単に紹介しておく。

一八四一年、マルクスがイェナ大学に提出した『学位論文』が、どのようなものであったかは、マルクス自身の断片的指摘はあったが（たとえば、一八六二年六月一六日づけのラッサール宛の手紙、参照）、長いあいだ一般には知られていなかった。それを、ドイツ社会民主党の文庫から引き出して、日の当たる場所においては、フランツ・メーリング（Franz Mehring, 1846—1919）である。メーリングは「一九〇二年彼の編纂せる『マルクス研究史上画期的』な『フレンクス・エンゲルス・ラッサール遺稿集』F. Mehring (hrsg.), *Aus dem literarischen Nachlaß von Karl Marx, Friedrich Engels und Ferdinand Lassalle*, Stuttgart, 1902. 第一巻」の『マルクスの『学位論文』をば

じめて公刊した。それから四分の一世紀を経た一九二七年、それはリアザノフ (Давид Борисович Рязанов, 1870—1938?) の手によって、新しく「本文注解」や「七冊の準備ノート」なども付け加えられて、『マルクス・エンゲルス全集』第一部第一巻第一分冊 (MEGA, I-1/1) におさめられた。この、リアザノフによって新たに加えられたもののうち、『学位論文』の本文第一部IVの「注解」と「第六ノート」は、当時のマルクスと「青年ヘーゲル派」との異同をみる上でも、重要な資料である。

なお、メーリングやリアザノフの公刊せるマルクス『学位論文』の原テキストとなった、マルクスのいわゆる「一〇冊のノート」については、それが、提出先であるイエナ大学からマルクスに返却された『学位論文』そのものだとみるよりは、むしろイエナ大学に『学位論文』を提出のさい、マルクスが手もとに残したコピーであるという推定の妥当性を、リアザノフは主張している。どちらにしても、イエナ大学には、当の『学位論文』そのものは、保存されていない。Cf. MEGA, I-1/1, S. XXIX—XXXI.

二 『学位論文』の問題意識

後期ギリシア哲学三派とヘーゲル

マルクス『学位論文』そのものの内容に入るにさきだち、ここでは、その題名、テーマ設定の動機から、マルクスの問題意識を明らかにしてみよう。

この『学位論文』は、なしかに、その題名は「デモクリトスとエピクロスの自然哲学の差異」となっているが、しかし、内容的には、ともに古代ギリシアの原子論者であったデモクリトス (Demokritos, 460—370 B.C.) とエピクロス (Epikuros, 341—270 B.C.) 両者の自然哲学の、たんなる差異を論じたものではなく、デモクリトスと対比してのエピクロス自然哲学の独自性を論証した論文である。

さらに、その「序文」から推測するに、当時マルクスは、このエピクロス哲学だけでなく、それに由来するエピ

クロス派を含めて、ストア派、懐疑派など後期ギリシア哲学三派の哲学を一括して検討せる「⁽¹⁾老大な著作」の計画をもち、この『学位論文』は、その「先駆にすぎない」⁽²⁾とされていた。以上の二点からも明らかのように、マルクスの『学位論文』は、構成上「デモクリトスとエピクロスの自然哲学の差異」という形式をとりつつも、内容的には、エピクロスが本命であったのである。

それにしても、このようなエピクロスら後期ギリシア哲学の研究に、マルクスを駆りたてたものは、一体何であったのであろうか。われわれは、ここに、『学位論文』の時期のマルクスの問題意識をさぐる鍵を見出すことができよう。というのも、そこにわれわれは、「青年ヘーゲル派」の一員としてのマルクスの、ヘーゲルにたいする独自の対決をみることができるからである。

周知のごとく、エピクロス派、ストア派、懐疑派の後期ギリシア哲学三派は、アリストテレス (Aristoteles, 384-322 B.C.) 以後の、古代ギリシアのポリス (都市共同体) が崩壊し、その共同体的絆がゆるんで、個人主義または世界市民的人間観が台頭してきた、いわゆるヘレニズム時代の哲学である。これをヘーゲルは、つぎのように「自意識」の哲学として特徴づける。ヘーゲルによれば、これらアリストテレス以後の後期ギリシア哲学三派は、エピクロス派が感覚 (個別性) を原理とし、ストア派が抽象的思维 (普遍性) を原理とする独断論を採るにたいし、懐疑派はこれらの原理を、つまり真理認識の可能性を否定する懐疑論の立場に立っていた。しかしこれらは三派三様の差異を含みつつ、真理をただ自己自身に求めようとする自意識の原理に立っていた点では、共通した哲学であった。しかもヘーゲルは、これら三派の哲学が、歴史的には古代ギリシア時代に属する哲学であるにもかかわらず、そこに古代ギリシアのポリス共同体崩壊の精神的兆候をよみとり、それらをつぎの個人主義的ローマ世界ないしはキリスト教的世界への過渡期の哲学 (いわゆる「不幸な時代の意識」) として、つまり時代転換の意識として把握した。しかし、まさにそれゆえにこそ、そこには、プラトンやアリストテレスのような思弁的偉大さは、もはやみ